

English Gerunds : A Minimalist Analysis Based on the Phase Theory

下仮屋, 翔

<https://hdl.handle.net/2324/1806779>

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

氏名	下仮屋 翔			
論文名	English Gerunds: A Minimalist Analysis Based on the Phase Theory (英語動名詞研究: フェイズ理論に基づく極小主義分析)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	西岡 宣明
	副査	九州大学基幹教育院	教授	大橋 浩
	副査	九州大学	教授	久保 智之
	副査	長崎大学	教授	稲田 俊明

論文審査の結果の要旨

生成文法理論は、ミニマリストプログラム (MP) のフェイズ理論により大きく進展した。フェイズ理論は Chomsky (2000)以降、様々な提案がなされ、Chomsky (2007)の素性継承理論が、大きな影響力をもつが、本論文は、素性継承理論を理論的、経験的側面から批判し、Chomsky (2000)の分析が MP の本来の主張と合致していることを英語の動名詞構文を用いて実証的に示したものである。英語動名詞構文は近年、理論的側面からはあまり注目されてこなかったが、本論文は、動名詞構文の時制機能範疇(T)の欠如性とそれと連動するフェイズ性に着目し、3種類の動名詞構文の類似点と相違点を併合操作の論理的可能性の一つである外的ペア併合(external pair-merge)に基づく派生の違いにより、見事に解き明かした。さらに、その分析が動名詞以外の様々な言語現象の解明にも寄与することを示した。

第1章では、分析対象となる対格動名詞構文、PRO 動名詞構文、属格動名詞構文の3種類の動名詞構文の分類、およびそれぞれの特徴を概観した。第2章で、本分析の理論的背景となるフェイズ理論の先行モデルを通言語的観点から吟味し、近年の素性継承理論や、ラベル付けアルゴリズム分析(Chomsky 2013, 2015)の問題点を指摘し、Chomsky (2000)の理論モデルが理論的にも妥当であり、最もうまく言語事実を捉えることを主張した。第3章では、対格動名詞構文に関する先行研究とその問題点を指摘した上で、分裂文、等位構造に関する経験的な事実から、当該構文が定形節と同様の CP 構造をもつことを示し、主要部 T の時制素性の欠如性に基づき、3種の動名詞構文の内部構造に関する諸特徴と分布を原理的に導出した。第4章では、フェイズ形成の可否と、フェイズ主要部のエッジ素性に駆動される内的併合可能性に基づき、数量詞句の作用域解釈を原理的に捉えた。さらに、外的ペア併合分析に基づき、属格動名詞構文の統語構造と対格動名詞構文との交替可能性も引き出し、主格独立分詞構文や名詞的動名詞や不定詞などの文法現象の適用可能性を示した。第5章では、日本語の「ガ・ノ交替」現象の先行研究の問題点を指摘した上で、外的ペア併合に基づく動名詞構文の派生を基に、より自然な統語派生を提示した。さらに、叙実動詞補文の派生を動名詞構文との類似点と相違点に基づき分析した。第6章で議論を総括した。

本論文の最大の特徴と利点は、最先端の理論的分析を注意深く吟味した上で、MP の基本に立ち返り、理論的側面と経験的側面の両方から最適のモデルを提案し、英語動名詞構文の分析を通じて、その妥当性を実証的に示した点にある。その論考は、従来の研究の問題点を克服し、動名詞構文と

それ以外の様々な文法現象に潜むメカニズムを明らかにしたものであり、今後のフェイズ理論研究の方向性を示したのみならず、従来のアプローチではうまく説明できなかった現象そのものに対する理解を深めた重要な分析として、生成文法における理論研究に大きな貢献をするものと評価できる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。